

天災は忘れなくてもやっつけてくる

鵜飼 哲夫

(読売新聞編集委員)

スペイン風邪といえ、今では、あのパンデミックを頭に思い浮かべる人が多いだろう。

第一次世界大戦さなかの1918年から20年にかけて起きた感染症の世界的な大流行で、世界の人口の4分の1に当たる5億人が感染し、死者が4000万〜5000万、流行性感冒と呼ばれた日本では、内地で45万人、外地では28万人が死亡したと推定されている。

新型コロナウイルスの流行でスペイン風邪が注目される以前に、どれだけの人がこの事実を知っていたのだろうか。私はといえば、スペイン風邪という言葉の本などで側聞していたが、正直これほどの災厄であったとは知らなかつ

た。

そこで、まずは歴史に学び直そうと、「世界史」「日本史」の教科書で、スペイン風邪がどう教えられてきたのかを調べてみた。確認した限り、ペスト（黒死病）についての記述はあっても、この災厄に触れた教科書はなかった。つまりは、スペイン風邪は、一般には「忘れられたパンデミック」だったのだ。「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」という言葉があるが、教科書にもない歴史から私たちは何を学べようのだろうか。

そんな思いを胸に、パンデミックの起きた2020年の夏、東京大学の歴史学者、加藤陽子

教授を訪ね、インタビューした。加藤さんは率直だった。スペイン風邪とその社会的影響について教科書には記載がないという指摘を、歴史家として率直に受けとめつつ、1923年に起きた関東大震災（死者・行方不明者は推定10万5000人）では、社会の風景が激変した結果、人々の記憶が強く残ったのに対して、そ

鵜飼 哲夫（うかい・てつお）



名古屋生まれ。

1983年に中央大学法学部卒、読売新聞入社。文化部で文芸、書評面などを担当。2013年から編集委員。

著書に『芥川賞の謎を解く』（文春新書）、『三つの空白 太宰治の誕生』（白水社）。編著に『芥川賞候補傑作選』（春陽堂）。インタビューをまとめた本に畠山重篤『牡蠣の森と生きる「森は海の恋人」の30年』（中央公論新社）、中西進『卒寿の自画像 わが人生の賛歌』（東京書籍）。

の数年前のスペイン風邪では世の中の風景が変わらなかったことが忘れられた大きな原因とした。

戦後、国内では大戦景気にわき、世界でも国際連盟が設立されるなど、歴史上、効率化、合理化を進める画期的出来事がパンデミックの惨事の後に相次いだことで、「記憶は上書きされ、疫病は忘れられていきました」（2020年7月28日、読売新聞夕刊「編集委員 鵜飼哲夫の『ああ言えばこう聞く』より）とも語っていた。

さて、私たちは、今回のコロナをどう歴史に残し、後世に伝えていくのだろう。もちろん、それは専門家などが様々な声に耳を傾けながら、事実を検証しつつ考えていくべきことであり、一記者の任ではない。というか、手に余る。

ただ、言えることはありそうだ。この新型コロナウイルスでも、戦災や震災のように都市などが崩壊するなど街の風景が変わることはなかった。とはいえ、スペイン風邪の時代とは違い、国内では緊急事態宣言で外出自粛、欧米などでは法律でロックダウンが実施され、繁華街から人の姿が消えるさまを人々はテレビでみ

た。目に見えないものに恐怖を覚え、街から活気が失われる。それは2011年の福島第一原発事故後、被災地となった自治体の姿とも重なる、きわめて現代的災厄の風景だ。

同時に、テレワークが広がり、自宅で過ごす時間が増え、運動不足を解消しようと、近所を散歩する人が増えたことも特色だろう。かくいう私もその一人。それまでの自宅、会社、酒場の三角コースだった生活が一変し、ほとんど歩いたことなかった、自宅近くの利根川べりの自然と日々接するようになった。そして、天気の良い日には、富士山が見える土手道を散策しながら、折りに触れて解剖学者、養老孟司さんの言葉を思い出す。

養老さんは、目の前の効率ばかりを重視し、「ああすれば、こうなる」という予測と統御でつくる「脳化」社会の行き過ぎを見直すよう、取材のたびにおっしゃり、そうした自然を疎外する意識中心のありようをどう変化させたらよいのか、と聞くと、いつも、「虫でも植物でも、人間がつくったもの以外の自然を1日10分だけでも見るといい」と語っていた。

「それで何が変わるんですか？」と聞くと、それこそ、「ああすれば、こうなる」という思考そのものじゃないか、という感じで、あきれた顔で答える。

「そんなもん、やってみなきゃわからない」

さて、私は、この2年ほど、1日10分以上、近所の自然をボーツと見つけている。つまりは、「やってみた」。何が変わったのか。よくわからない。きょうもこの原稿を書くために、コロナをどう後世に伝えるのかを自然の中で考えた。もちろん、妙案はない。当たり前だが、人間が作った都市のビルなどと違い、動植物や虫が四季折々、姿形を変えていくさまに新鮮さを覚え、彼らとともにあるウイルスや細菌の、人類よりもはるかに長い歴史を感じるのみである。

「天災は忘れた頃にやってくる」と言われるが、震災もパンデミックも、歴史の教科書に書かれるようになっても必ずやってくるはずである。忘れないことはもちろん大切だが、悠久の自然の営みは人知を超える。

天災は忘れなくてもやってくる。